ベントリーとデューイの連関

——トランスアクションの形成——

上林良一

まえがき

A・F・ベントリーとJ・デューイは、それぞれ政治学者ならびに哲学者として、すでにゆるぎない地歩をきづいていた一九四十年代の初めの頃から、数年間におよぶ、新しく重要な分野での共同研究を果した。その共同研究の成果は、一九四九年に出版された二人の共著『知ることと知られるもの』(Knowing and the known)であり、共同研究のプロセスは、ベントリー理論の研究家、S・ラトナー等によってまとめられた一九六四年の『ジョン・デューイとアーサー・F・ベントリー—哲学的文通、一九三二—一九五一』(John Dewey and Arther F. Bentley, A Phyloso-phical Correspondence 1932-1951)によって知ることができる。われわれは、共著『知ることと知られるもの』が出版されたのは、ベントリーが七十八才、デューイが九十才という晩年であったことに思い及べば、二人の共同研究の結実とそれにいたる道程にふかい敬意をささげることはいうまでもないが、そればかりではなく、共同研究の内容である論理学、用語論、学問方法論、社会観という、どちらかといえばデューイの本来の研究分野で、ベントリーとデューイが一致した見解を持ったことに注目しなければならないだろう。それはトランスアクション(transaction)の立場であった。

トランスアクションの形成をめぐっていえば、ベントリーがデューイにあたえた貢献ばかりが、特に大きかったとは、一概に云えない。しかし、デューイが彼の論理学の領域で、トランスアクションの立場を確立するについて、ベントリーがいちじるしい影響をあたえた共働者であったことは、あやまりないところであろう。共同研究者としてベントリーを得たことによって、デューイのトランスアクションの考え方が確立したと云ってよいであろう。もちろん、

この点についての両者の厳密な理論的連関については、仔細にわたる別の検討を要するだろう。

ここでは、直接この問題についての結論ではなく、ベントリーの一九〇八年の『政治過程論』にあらわれているトランスアクションの特色、ならびに、デューイの哲学、論理学のうちにみられるインターアクション、すなわち相互作用の概念をとりあげ、共著『知ることと知られるもの』の原動力となった『ジョン・デューイとアーサー・F・ベントリー—哲学的文通』を素材として、インターアクションとトランスアクションの関連を調べることを目的とした。この論文では、第一節で、ベントリーとデューイのプラグマティストとしての理論と実践の共通性について述べ、第二節、第三節では、一九四十年四月の手紙にはじまって、ベントリーの『政治過程論』とトラスンアクショナル・アプローチについての両者の評価について調べ、第四節では、デューイの『論理学』におけるインターアクションの概念をとりあげた。

一

云うまでもなく、A・F・ベントリーとJ・デューイの二人は、『政治過程論』によって名のある政治学者として、またアメリカを代表するプラグマティズム哲学者としてよく知られている。ベントリーとデューイは、周知のように、一九四九年『知ることと知られるもの』を共著として出版しているほどであるから、思想的・理論的に深い連関を持っていたことは、当然のことではあるが、しかし、この二人は、あらためて考えて見ると、理論的、思想的な研鑽の過程だけにとどまらず、その生涯にわたってさまざまの交流と共通性が指摘されよう。

著書『知ることと知られるもの』となって一九四九年に結実した二人の共同研究の結果が重要なものであったばか

りでなく、実に、その共同研究の背景となった地味な努力が積み重ねられた過程が注目されなければならない。一九四六年十月から一九五〇年十一月までに、ベントリーとデューイは、計四八通の手紙を交換しているのである。けれども、そればかりではなく、これら四八通をふくんで、一九三二年以来の約二千点にのぼる文書が、一九六四年、S・ラトナー、J・アルトマン、J・ホイラー等の共編『ジョン・デューイとアーサー・F・ベントリー―哲学的文通』として出版されたのである。なおベントリーとデューイのあいだには、これにかぎらず、数多くの蓄積された交流と協力の過程があったものと考えられる。

第一に、ベントリーが一八九三年から九四年にかけて留学ののち、フランスとドイツの社会学理論について講義をした一八九五年、シカゴ大学講師の頃、シカゴ大学で哲学科主任教授であったデューイの講義に出席したことは奇しき因縁であった。この時、デューイの論理学の演習と倫理学の演習に出席したベントリーは、多くの示唆を受けながらも、デューイにはまったく見知られることがなかった。[1] このことについては、後年、一九三二年、十一月一五日、ベントリーが、インディァナ州パオリからデォーイにあてた第一信のなかで、つぎのように述べて往事を回想しているのが印象的である。「あなたがシカゴ大学におられた頃、私はあなたの講義の片隅に座っていた。そこで私は、そのことを評価できるとすれば、私が受けとったいくつかの貴重な教訓の一つとして、永らく考えてきたヴィジョンを獲得することができた。私はついに仮の（試論的な）結果が獲得されうる研究領域を発見することができたので、私の著書『数学の言語学的分析』のコピーをあなたにおおくりする」[2] とベントリーが述べて、この手紙がのちの六六八頁におよぶ厖大な文通の手はじめとなったのである。このように考えると、一八九五年のシカゴ大学での思い出は、客観的に大きい出来事となったといってよいだろう。ベントリーがデューイにおくった『数学の言語学的分析』(Lin-

guistic Analysis of Mathematics）は、彼がB・ラッセルとA・N・ホワイトヘッド（Whitehead）の共著『プリンシピア・マセマティカ』（Principia Mathematica）に関心をよせ、D・ヒルバート、L・J・プラウァ、K・ゲーデル、A・タルスキの数学的著作を研究したものであって、数学上、論理学上の実体ならびに関係を、過程として、手つづきとして、出来事として捉らえたものであった。この方法は、デォーイが、一九一六年『実験的論理学論文集』で述べた内容とひろい意味で一致するといわれている。(3) したがって、ベントリーによるパオリからの第一信の冒頭で、シカゴでの記憶を語っているように、デューイの講義内容からの示唆について感謝していることは、尋常ならざる後年の学問的成就と共同研究の成果につながる機縁を提供したことを物語るものであろう。ベントリーがシカゴ大学でデューイの演習に参加して「大いなる示唆」を得たと述べていることは、表面上は、ベントリーのデューイに対する敬意と謙遜に終止するように受けられないこともない。もちろん、ベントリーの方から積極的に著書を送って文通をすゝめる機会をつくったわけであるから、そうした心理や要素があっただろうし、またそれは欠かせないものではあったとしても、ただそればかりではないこともあきらかなことである。具体的にいえば、ベントリーには、一八九五年『社会科学における研究の単位』（The Units of Investigation in the Social Sciences）があり、それは、彼の科学的認識論の萠芽であったが、のちに、トランスアクションの概念の形成をめぐってのベントリーとデューイの協力以前に、ベントリーに対するデューイの大えい影響をしめすものといえよう。(4)

第二に、ベントリーとデューイは、大げさに、政治的人間とはいえないとしても、それぞれ、たんに思想的理論的活動ばかりではなく、社会的実践活動に関心を寄せ、かつ大きな貢献を果したのである。いうまでもなく、先入見を排し、実際経験から学んでゆこうとした哲学者、デューイは、当然、現実の社会生活や政治生活に関心が深かったこ

と、市民運動の組織者として、ときには市民団体のデモを指導したことも、彼の学問や思想と無縁のものではなかった。したがって、一九三七年、レオン・トロツキーがスターリンに対してテロを企てたとの理由で起訴されたとき、トロツキー防衛のためのアメリカ委員会の名誉委員長となって彼を擁護したのは、典型的な出来事であった。一九四〇年、ニューヨーク市立大学教授に推薦されたB・ラッセルが保守系アメリカ人から教授就任に反対されたとき、文化自由委員会の委員長となって、ラッセルへの攻撃に反対するとともに、「社会的現実対警察法廷のでっちあげ」(Social Realities versus Police Court-Fictions) という彼の論文が収められた『バートラント・ラッセル事件』を出版した。また後年、日本国憲法とその第九条の内容にも大きい影響を与えたパリ不戦条約の成立に貢献した。一九二一年アメリカでの「戦争禁止アメリカ委員会」の主要なメンバーとしての彼の働きも没することができないであろう。

なお、デューイの活動は、直接に政治運動にその軌跡を伸ばし、労働党を支持した点では、ベントリーの活動と政治的立場を共通にしている。一九二四年の大統領選挙は、民主、共和両政党に対して第三党の抬頭をもっとも明瞭にしめしたものであった。中西部ウィスコンシン州出身のR・M・ラフォレットの労働党を、デューイは支持して、論説を書くとともに街頭で演説をした。一九二八年にも、彼は、社会党の大統領候補のN・トマスを応援した。

ベントリーも亦、一九一一年、インディアナ州パオリに移って、第一次大戦中はインデアナ州の米国赤十字支部を組織し、のちには、州赤十字委員長となって活躍した。一九二四年に労働党にくわわり、R・M・ラフォレットを大統領に推す選挙運動をおこなった。このベントリーの背景には、第一次大戦後のアメリカにおける経済発展と経済の独占集中化を批判して、これらに圧迫される小さい農業経営者、労働者の立場を擁護しようという主張があったのである。このような活動をともにしたベントリーとデューイは、したがって、政治的立場、ヒューマニズム、正義感、

市民党としてのイデオロギーを共通にしていたのであった。

ちなみにデューイに見られる第三党的主張、あるいは市民の立場に立つプレッシュア・グループ的運動へのかかわり方は、たんなる社会運動にあきたりない一つの政治運動の形態をしめしていたと思われる。「独立反対連盟の会長が一九二九年になくなったあとで、この会はデューイに会長になることを求めた。デォーイは、この団体が人民のための院外団になろうというものであればひきうけてもよいと答え、この会がそのように正式に名前をかえると会長に就任し、機関紙『ザ・ピープルズ・ロビー・ブリテン』に何度も書いた。

デューイがこの団体の会長であった一九二九年から三六年までは、米国が不況に入り、脱出のための模索をつづける時代となった。この時代に、デューイが市民運動をになう知性の代表と見られたのは、このような活動を背景としてのことである。一九二九年には、自由主義者をあつめて独立政治活動連盟を絡織し、初代会長に就任している」[5]とデューイの政治活動の圧力団体的性格にふれて鶴見俊輔が述べている。

おなじように、ベントリーも一九一八年以後、ノースダコタのノン・パルチザンリーダーの活動に大きい関心を抱いて研究した。彼は小農民、小企業家、産業労働者の経済状況は、効果的に大企業の諸利益と交渉できるような圧力団体として成長してゆくように改善されねばならないと主張して、ラフォレット候補の選挙運動を助けることとなった。それ以来、一般的に圧力団体の運動に理解を示すばかりでなく、小数化してゆく農民に対して、政党組織に頼るのではなく、圧力団体を組織して自己の特殊利益を実現してゆくことをすゝめたのである。このように、自由主義的、むしろ社会主義的方向と見られるようなイデオロギー態度、なお現実の市民、農民運動の組織者として政治にかかわりを持つことは、ベントリーとデューイの両者に共通した傾向であったといえよう。[6]

第三に、これまで述べたところからひき出されるように、実際生活に対してふかい関りをもっていたばかりではなく、学問的視野とその業績が広汎であったことも、ベントリーとデューイの共通した特徴であった。すなわち、ベントリーは、代表作としてあげられる一九〇八年の「政治過程論」以外に、論理学、数学、認識論、科学論等の諸分野に著作活動がおよんでいる。これについては、決して、はじめ『政治過程論』にあらわされている政治学、社会学への関心が変化して、論理学、科学方法論の分野に拡大し移行したものと考えるべきではなく、むしろ、もともと他分野に拡大したとされる科学方法論の基礎が、初期の政治学の方法論として十分に意識されていたものと解されよう。(7)

このような意味では、デューイについても亦、われわれは、総じて云えば、哲学者デューイの性格のなかに、教育学者、心理学者、政治評論家としての特色が、一体となって結びついていたものと考えることができよう。要するに、デューイの研究活動は、倫理学、論理学、教育学、美学、宗教学、政治哲学等多彩な方面にわたっている。これらはすべて、究極的には、経験から学ぶとされる実際主義、プラグマティズムの表現であると考えると、この意味で、デューイとベントリーは、プラグマティストとして研究の動向をおなじくしたものと総括することができるだろう。プラグマティズムの哲学は、もとより、出来上った体系的な建物ではなくて、考え方の方法というところに重点があると解されるからには、これら二人の広汎な学問的業績に共通した特色は、プラグマティズムの根本的特質に根ざしたものであるということができよう。結局、ベントリーとデューイの共同研究の過程と成果は、二人の共同労作、『ジョン・デューイとアーサー・F・ベントリー―哲学的文通、一九三二―五一』（一九六四年）ならびに、『知ることと知られるもの』（一九四九年）の両著作に凝縮されているが、これらは、それぞれ、方法としてのプラグマティズ

ムの哲学の中核をしめしていると考えられる。

（1）鶴見俊輔『デューイ』人類の知的遺産60、一九八四年、一九五頁。
（2）S. Ratner, J. Altman, J. E. Wheeler ed., J. Dewey and Arther F. Bentley A Pnilosphical Correspondence 1932-1951, 1964, p. 51.
（3）鶴見俊輔前掲書、一九六―七頁。
（4）喜多靖郎「A・F・ベントリーの生涯と思想」近大法学、第二十六巻第四号、四四頁。
（5）鶴見俊輔前掲書、一一三頁。
（6）喜多靖郎前掲論文、九十頁。
（7）上林良一「ベントリーの集団理論の方法論―トランスアクショナル・アプローチの発展―」、法学論集、第三十四巻第三・四・五号、二三―四頁参照。

二

ベントリーは一九四〇年四月十四日付、デューイにあてた手紙の冒頭に、「われわれは、（一九三五年、キー・ウエストからの手紙で）個人的―社会的（individual-social）という観念について論じたが、私はその問題について、より深く突っこんだ議論をすすめることができなくて残念に思います」という書き出しで根本的重要問題である「事物」（event）を説明する方法について、つぎのように述べている。「あなたの論文『Reflex Arc』で、あなたは、プラトン的な内容と外観との間の境界（ridge）について言及した。そして、昨年十一月の講演『経験における自然（Nature in Experience）においては、まさに、あなたにかかわる自然と人間の間の『継続性の裂目』について言及した。ミード（Mead）も、最近の講義『行為の哲学』（philosophy of Action）のなかで、「限界」についてわれ

われの最大の因難について述べた。私も、三年間『表皮』（skin）の問題になやまされたのである。

さて、私の推論によれば、表層―ラインを越えて『一つの事象』を、すなわち、知覚的に、言語的に、社会的に説明することができるとすれば、個人的、社会的ディレンマは消え去ってしまうのである。『現実主張』（Realism Assertion）といったものは、すべてなくなって、それにかわる傾向があらわれる。『Reflex Arc』の論文で、諸要素よりも、むしろ、刺戟と反応（stimulus and response）の諸相（phases）をとりあげた（「要素」は孤独で因果的に結びつき、「相」は一つのシステムにとり込まれている）。一般的態度というのではなく、直接にはたらく観察として、もし、刺戟と反応が相であるとすれば、事象は両者をふくみ、われわれは、われわれ自身、一つの事象をさように観察し、そのように働くべく訓練すると述べて、私の主張は、あなたにフォローしてゆく。おなじように、一つの事象は、二つあるいはそれ以上の個人をこえて、孤独な個人としてではなく、必要とあれば、相としてみられ、多分それすらない場合もありうる。……私は、同様にあなたの方法でそれを妥当させようと思う。

数学と物理学は、想像、無限大、継続の工夫によってなされたこの直接観察を完成するものであると、私には思われる。数学と物理学は、すべての悪魔が、彼等の取り扱いの直接性の認証をひき出すことはできないとしても、こうした方法を使って、実際的利点を獲得するである。この考えは無限に拡大する新聞、ラジオの用語を使っていえば、おなじような方法で、ふたたびフラッシュするかどうかは知らない。しかし、私がなそうとしていることは、数学的公式が通用しない社会的領域において、彼等が不満を述べるとしても、物理学者が数学的に保証するこうした直接的説明の利点を獲得することでなのである。

考えてみると正確には証明することができないとしても、私の著書『政治過程論』（The Process of Government）

は、粗い方法で、この種の仕事を果したものであったと思う」[1]

この叙述から、第一に、われわれは、一九〇八年、ベントリーが、『政治過程論』を生み出した努力とその背景を、あらためて想起させられる。一九〇三年からシカゴタイムズ・ヘラルド紙とリコード・ヘラルド紙で、記者として、また編集者としてはたらいたベントリーは、シカゴのダウンタウンのクリーラ図書館でさまざまの調査をして、『政治過程論』を書きあげたのであった。連邦政府とはなれたシカゴという大都市で、多様な圧力団体の攻防を直接見聞して、ベントリーは、本来の新聞記者の勤務を果しながら、冷静適確なまなこで、政治的諸事衆の流れを分析したのであった。記者として得た知識と豊富な「生の資料」をふんだんに使って仕事をしたのであるが、彼は、ただたんに傍観者流に、政治を論じたのではなく、背景として、当時のアメリカの合衆国の鉄道会社にあらわれたような企業の独占資本化や資本主義発展や予盾の展開についてのはげしい批判、市民や小集団の恵まれない生活に対する同情が、その基礎にあったことが、十分に想像されるであろう。したがって、さきに述べたように、[2] ベントリーは一九一一年にジャーナリズムの世界をはなれてから、再び社会科学研究にたちかえるとともに、インディアナ州の赤十字活動に尽力し、また第一次大戦後のアメリカにおける経済の集中の動向を批判し、小規模農家、工場労働者の利益を守ることをつよく主張した。要するに、多彩な社会的実践的活動に参加したばかりでなく、ベントリーは、デューイとおなじく、ラフォレットを大統領に押そうとする進歩主義、革新主義の政治運動―の世界で活躍することとなったのも、おなじような背景とその延長上で理解することができよう。

第二に、ここでは粗い方法、(in a crude way) とことわりながらも、ベントリーの新聞記者時代の現実直観的なデータによる『政治過程論』のアプローチは、直接的観察の方法を強調しているという点に留意しなければならないだ

ろう。したがって、二つのことをとりあげることができよう。一つには、この手紙のはじめから指摘しているように、個人的・社会的（individual-social）の用語や概念の使用について、ベントリーは根本的な疑問を呈して、事象を知覚的に、言語学的にとりあげ、個人的・社会的といった区分を越えようとする態度や考え方を提起していることである。ここでいわゆる個人的・社会的という概念上の分離を批判する態度や方法は、同時に、主観と客観、対象と意識、個人と国家という分離をもするどく批判する考えと共通し、精神と物質、人間と環境の二分法をもきびしく拒否することとなり、おのずから、トランスアクショナル・アプローチの導入を意味するものである。第二に、事象に対するありのままの正確な解釈が基本的にとりいれられ、しかもその方法が、本来、一九〇八年の「政治過程論」の方法としてもちいられていたと、ベントリーがとくに強調してこの手紙のなかで述べていることが注目されよう。われわれは、この箇所からも、デューイとベントリーに共通した事象のとらえ方を認めるとともに、ベントリーが早くから手がけた「生きた資料」に対する社会集団活動（social grooup activity）をとりあげる立場として、一貫して、トランスアクショナルな立場が生かされていたということができるだろう。(3)

（1） S. Ratner, J. Altman and J. E. Wheeler ed, op. cit., pp. 75-6.

（2） 第一節参照。

（3） 上林良一前掲論文、四五―七頁参照。

三

S・ラトナーは、ベントリーによってなされた特殊な貢献について、五項目の特色をあげているが、そのなかで個

人と集団へのトランスアクショナル・アプローチ（the transactional approach to individuals and groups）としてつぎのように述べている。「ベントリーとデューイは、四十年後、著書『知ることと知られるもの』のなかで、「トランスアクション」の術語を使用し、発展させたのであるが、しかし、この観点に関する根本的素材は『政治過程論』のなかに早くから見出される。その一例は、人間の活動の相としての物理的社会的環境についてのベントリーの説明である（一九三―九六頁）[1]。他の例は、主観的と客観的、心と物質、欲求と欲求する人間、人間の外的行為と彼等によってなされる制度と事柄、これらはプロセスのことなった諸相としてもっともよく論じられる、非常に粗い説明である。おなじように、彼は、意識的なものと無意識的なもの、政策形成、発明、発見への個人的な貢献と社会的貢献の間の区別をもっとも小さく考えたのである（一九六―九七頁）[2][3]」

またベントリーが、一九四十年四月十四日附のデューイにあてた手紙の終りで、直接観察の方法と『政治過程論』の立場について述べた内容については、第二節でふれたところである。すなわち、「私がなそうとしていることは、数学的処理が通用しない社会的領域において、彼等が不満を述べるとしても、物理学者が数学的に保証するこうした直接的説明の利点を獲得することなのである」と述べているのは、直接観察と自然科学的方法の導入を強調しているものであり、つづいて「私の推測でいえば、私の著書『政治過程論』は、正確には証明することはできないとしても、粗い方法で、この種の仕事を果したものであったと思う」[4]と述べているのは、ベントリーが、はるかに以前、一九〇八年の自己の著作の頃から、一貫して、ここで強調している直接観察の方法が使用されていることをしめすものであるとともに、同時に、この叙述から、ベントリーの学問的業績と関心の広さを、変化や拡大としてとらえるのではなく、政治学の立場や方法論の研究が、必然的に、科学論や用語論、論理学を基礎とすることを認めることができよう。さ

て、かように述べたのち、分離・継続（discrete-continuous）、個人的・社会的（individual-social）等の分類をきびしく拒んだベントリーの主張に対して、四月一九日附のデューイによる返信は、ベントリーのこうした提言と主張に基本的に賛意を表していることは、注目されるべきところであろう。[5] ここでとりあげられている直接観察、直接調査、そして個人的・社会的の分類についての批判は、もともと、一九〇八年の『政治過程論』の基本的方法論のなかで、すでに、粗いかたちではあるが、考え方の萌芽を見ることができるというのが、ベントリーの根本的な見解であるからには、この場合、デューイのあらわしたベントリーへの賛意の表明は、これらをふくんで全面的に、ベントリーの方法論に対する理論的同意をふくむものと考えてよいであろう。

また一九四四年、二月二日付のデューイにあてたベントリーの手紙の冒頭で、トランスアクションについてつぎのように述べている。すなわち、「一つの事柄としてのトランスアクションについていえば、私が心のなかで考えていたことは、一九〇八年の『政治過程論』で論じたクロス・セクショナル（cross-sectional）の概念にまでさかのぼって、表層を越えて（across skins）徐々に強化されてきた観察なのである。あなたは論理的探求の立場で、『トランスアクション』を発展させたばかりではなく、『有機体の、あるいは有機体による』（“of and by” the Organism）というように、トランスアクションの概念を公式化するのに力をつくした。あなたは、有機体をできるだけ自然的世界に属するように限定し、義務づけたが、（観察者にとっては）あなたは、人々が理解できるような言語で、彼等に「教育」しようとしたことになるだろう。興味ふかいこと（この企てを可能にしているもの）には、いかにして私のアプローチの方法を発展させようとしても、私は、あなたが、私のなしうる何らかの説明を期待していたことに気づくであろう—直接的公式化としてよりも、むしろ、有機体について、あなたが、いっている条件づけとして設定され

ているにしても。

いいかえると、「一つの事象としてのトランスアクション」のフレーズに関して、われわれ二人は、空間的・時間的特徴をもつものとして、すべての資料を要求するのである。あなたのいわゆる「不確定状況」とは、一般的背背景からいって、結果的には、「保証つきの言明」（warranted assertion）のように自然的・事実的なものである――探求の評価のためには、主観的な事柄としての不確定状況では、結果的には欠落している事実の確実性を強調するわけであるが、そこで、私は、もしインターアクションが二つのもの（その場かぎりの形をとった「物」）の間で考えられるとするならば、相互作用するものを融合するトランスアクションとは、トランスアクション的なものという意味では、一つの「物」なのである。一つのトランスアクション的な（混乱した）出発もまた、またインターアクション的なものに分化していないので、それ自身ぼんやりした一つの「物」なのである」[6]。

つぎに、デューイの側から、一九四四年、四月二十五日のベントリーにあてた手紙の末尾で、ベントリーの『政治過程論』にふれて、以下のように述べていることに注意しよう。

「以上述べてきたところのことは、これまですすめてきた根拠をあきらかにするための叙述であって、もしわれわれの間に何らかの相違があるとすれば、それはきちんと調整され、必要とあれば、「再調整」がなされるべきであろう。決して決着として鎮められるものではない。しかし、これまでは、知識についての方向を与えるものとして、関心からはなれなかった――というのは、知ることについての学問的な観点に到達することができなかったということである。「interest」「concern」の語は、もちろん、今日、これらを用いることは危険なのであるが――なぜならば、それらの語は「主観的メンタリズム」の意味があまりにも強いのであるから。しかい思いおこすに、『政治過程論』で、

あなたは、根本的に、トランスアクショナルな立場をしめすものとして、「インタレスト」が用いられるべきであると述べた[7]」

ここにとりあげられるように、われわれは、ベントリーの特有なインタレストの概念とその用法のなかに、デューイが、トランスアクショナルな方法論の萠芽を観察して、指摘していることは、重要であり、かつ興味ふかいことであろう[8]。

一九四四年、十二月十三日付のベントリーからデューイへの手紙がある。これは一九四四年九月四日付のデューイからの示唆を得てのちに「the Journol of Phylosophy」に寄稿された論文の原稿となったのである。その手紙でありかつ論文、「知ることと知られるものについての用語学」（A Terminology for knowimgs and known）のなかで、ベントリーはつぎのように述べている。すなわち「ウイリアム・ジェームズの「直接的」あいは「中立的経験」は、たしかに、知ることの分野における直接観察の形をとった努力であった。インターアクションとトランスアクションを用いて、かつ主観的でも客観的でもなく、システムと組織としての「経験」の提示によって、デューイの発展（いかにかれの解説者がこの点で曲解したとしても）は、これとおなじような形をとっている。一九三八年のかれの『論理学』と一九〇三年、一九一六年の論理学的研究において、デォーイは、状況的背景のもとで、探究（inquiry）の形式を発展させた。ベントリーの『政治過程論』は、こうした論じ方をもとめ、のちの言語による数学の分析、心理学の状況的表象、そして行動的空間と時間についての事実的取扱い、これらはすべてこのラインに結びつくものである[9]」

ここでも、ベントリーの『政治過程論』で用いられた方法が、のちの言語学的研究、知識論、論理学、科学論等に

つらなるものであることをしめすのみならず、これらは、パーム、ジェームズ、デューイの方法論、つまりプラグマティズムの特質にむすびつくものであることが強調されよう。

これまで述べたように、ほぼ五つの通信の内容から、われわれは、多かれ少なかれ、ベントリーの『政治過程論』にふれた部分を中心として、ベントリーとデューイの共同研究のプロセスにおいて、一つには、トランスアクショナル・アプローチの概念に関する両者の基本的な一致、二つには、およそ四十年以前の『政治過程論』の方法論にみられるトランスアクショナルなアプローチの発想について一致した見解をもっていたことを認識することができよう。それほどに、デューイとベントリーにとって、『政治過程論』の基本的立場は、のちの二人の論理学、哲学、用語論の発展に大きい意義をもっていたと云うことができるのであろう。

（1）「通常、われわれは、かれらを特徴づける資質によって、それに働らきかけると考えられる、人間から外部的で鋭く分離されたものとして環境をとりあつかう。それは、われわれの経験についての日常会話にとって役に立ち、われわれの活動のある局面の予備的な記述にも役立つ。誰でも、われわれの科学的知識から地理を消し去ろうとは思わない。ただこの場合でも、社会の研究にとってこの地理を人間活動のある局面について人間活動のある局面についての非常にかけはなれた、外部的な記述とするということを記憶しなければならない。たとえば物理的環境、合衆国人口をとりあげて考えてみよう。政治的・社会的活動の研究にとって、それが、人間活動の一部分であるということを除いて、重要性または意味をもつような人々の一要素が存在しうるだろうか。いいかえれば、われわれが用いなければならないのは、たんなる環境ではなくて、環境とすべてのもの（environment and all）としてのみ記述される特殊な人間活動である。それこそわれわれの生の素材なのである」。A. F. Bentley, The Process of Government, 1908, pp. 193-4.

（2）「環境についてのこの考え方は、社会の解釈にとっての価値の観点からいえば、われわれがすでに放棄した主観的、客観的の区別というものに引きもどすものである。なぜなら、物理的環境は主観的なものが対置されている客観的なものの大きい部分をなしているからである。実際、古い区別、事実としての精神と物質、表と裏等は、あらっぽいメタファーであり、

人は、こうしたメタファーがながく使用されてきたのは、一寸した人間の巧妙さの精緻をあらわすものであるというかも知れない。欲求と欲求する人間、人間の外部的行為、制度、人間によってなされた事が、具体的になされ、ことなった解釈による「物事」としてとり扱われる時、存在するように見える外的世界との区別は、粗雑なものである。……おなじように、一般的に物的なものが通過するプロセスの濃淡としてではなく、具体的になされる意識の区別は、同様に、あらっぽい社会の全体的な神経組織の上にあり、実際、全体格の上にあるのであって、ただたんに、ある粗雑に書かれた脳センターの中の「状態」にあるのではない。」ibid., pp. 196-7.

(3) S. Ratner, J. Altman, J. E. Wheeler ed., op. cit., pp. 30-31.
(4) ibid., p. 76.
(5) ibid., p. 76.
(6) ibid., p. 213.
(7) ibid., p. 242.
(8) 上林良一前掲論文、四〇—四二頁参照。
(9) S. Ratney, S. Altman, J. E. Wheeler op. cit., p. 348.

四

以上によって、われわれは、のちに一九四九年の『知ることと知られるもの』のなかで、トランスアクションの概念を明瞭に提示したデューイとベントリーの二人が、『哲学的文通、一九三二—一九五一』において、早くから、トランスアクショナルな方法論を探究し、確認していたことを推察することができた。しかも、デューイとベントリーがトランスアクションの概念をお互いに確認する際、一九〇八年のベントリーの旧著が、大きい基礎をあたえていたと解される。

ここでは、デューイの論理学のなかから、のちにトランスアクションの概念によって、とって代られることとなったインターアクション、すなわち。相互作用といわれている概念について検討してみよう。

いうまでもなく、デューイによる論理学は、一九三八年の『論理学』のサブ・タイトルにあらわれているように、本来それは、「探究の理論」（the theory of Inquiries）であることは、よく知られている。デューイは、『論理学』第一篇の序論で、探究の基盤（Matrix of Inquiries）をとりあげ、つぎのように述べて、彼の論理学の立場を説明している。すなわち「要するに、私の理論は以下のようなものである。（いろいろの特徴をもつ）論理形式では、すべて探究の操作のなかで生じ、その操作が『保証つきの言明』（warranted assertion）を生むように探究をコントロールすることと関わりをもっている。このような考えは、現在の探求過程を反省すれば、論理形式が発見され、あきらかになるということより以上に、ふかい意味をもっている。もちろんそのことも意味するが、なお、論理形式は探求の操作のなかに由来しているということを意味している。便利な表現をもちいれば、探求の探求は、論理形式の「認識根拠（causa cognoscendi）であり、探求それ自身は、探求があきらかにする論理形式の「存在根拠「（causa essendi）であるということである」[1]と述べたのち、「探求の現実的基盤」―生物学的側面(biological)、そして「探求の現実的基盤」―文化的側面（cultural）について説明している。

また探求と知識についてつぎのように述べて、探求と目的の関わりを論じている。つまり、「ここで私の立場の意味について説明しよう。探求というものが疑念と関わっていることは認められるであろう。承認とは、探求の目的（end）に関して一つの意味をもっている――目的には、もくろみ（end in view）と終了という二つの意味がある。探求が疑念からはじまるとすれば、疑念の必要をとりのぞくような状態を定めることによって、探求は終了する。

その状態は、信念（belief）あるいは知識（knowing）という語でしめされる。私は、そうした言葉よりも、「保証つきの言明可能性」（warranted assertibility）という言葉で説春しよう」と述べている。[2]

さらに、デューイは、「探求の定義は何か」と問い、つぎのように定義づけている。「最高度の一般化された探求の概念を正しく公式化すれば、どうなるだろうか。この章で直接展開され、以下の章で間接的に展開される定義は、つぎのようなものである。探求とは、不確定な（indeterminate）状況を、確定した状況に、もとの状況の諸要素を一つの統一された全体にかえてしまうほどに、状況を構成している区別や関係が確定された状況に、統成された方向づけられて転化させられることである。」[3]なお、不確定な状況を説明して、「不確定な状況は、個人の側から説明すれば『面くらった』（lost our head）状態である。不確定な状況は、さまざまの名称で特徴づけられる。それらは、かき乱された、困った、曖昧な、混乱した、矛盾の傾向にみちた、不明瞭な状況なのである」と述べている。デューイによれば、問題状況一般があるのではなくて、人間各自にとって、それぞれの問題状況があるので、人はそれぞれ自分自身の状況にぶつかり、解決しようとすすんでゆく、その問題解決への過程が探求であろう。[4]

さて、このような特異な性格をもったデューイの実践的、プラグマティックな論理学のなかで、われわれは、問題状況、環境とのかかわりあいで、しばしば使用されているインターアクションの概念に注意する必要があろう。

たちえば、先にあげた「状況」についての説明につづいて、「未解決の状況の生物学的—先行条件は、すでに述べたような有機体と環境の（in organic-environmental）インターアクションにおける不均衡状態である。統一の回復は、いかなる場合でも、現実の条件を実際に変化させる操作によってのみ得られるので、たんに「心理的」な方法では得られない。

したがって、状況は、「主観的」な意味でのみ疑わしいと考えるのは誤りである。現実に存在するものは、すべて完全に確定しているという考えは、物理学そのものの進歩によって疑問とされている。たとえ、そうでないとしても、完全な決定ということは、環境としての存在にはかかわりないことである。なぜならば、自然は、有機体あるいは自我（あるいはどのような、名称であっても）とのインターアクションにはいったときにのみ環境なのであるからである。[5]」

ここに述べられているように、未解決な状況の先行条件を有機体と環境のインターアクションにおける不均衡状態であると規定し、しかも、完全な決定は、環境にはあり得ないとしていること等は、もっとも明瞭に、デューイの状況観察をあらわしているとともに、有機体と自然のかかわりあい、とくに相互作用としてのインターアクションの重要性を強調していることに留意するべきであろう。デューイは、またこれにつづいて、「すべてこういうインターアクションは、瞬間的、断面的（cross-sectional）なものではなく、時間的な過程である。それゆえインターアクションがおこる状況が、どうなるかということは不確定である[6]」そして、「そこで、直接的な問題点は、有機体がどのような反応をしめすかということである。それは、有機体の反応と、それが現実の結果をもたらそうちする場合の環境的条件とのインターアクションに関係がある[7]」と述べている。

かように検討してみると、ここで使用されているインターアクションの概念は、デューイの論理学、さらに云えば、プラグマリズム哲学にとって欠かせないものであることが知られる。ここにあらわされている、インターアクションの概念のもつ機能は、一九四九年の『知ることと知られるもの』においては、すっかり、トランスアクションの概念におきかえられることとなったのである。そして、インターアクションからトランスアクションへの発展と変化のプ

ロセスは、さきにふれたように、『哲学的文通』という思想的書簡往来のあいだに錬りあげられられたものである。トランスアクションは、全体系の機能的観察であり、人間の全体的経験を相関的、機能的なものとしてとりあげるこのに対して、インターアクションは、部分的であり、相関的におたがいに一方が他方の部分であるというよりも、独立したものの間の相互依存に固執したものである。「インター」とは、それぞれの性格、特徴が独立して保たれるとともに、独立に存在するものの間の動きをしめしている。したがって、デューイとしては、最終的には、ベントリーとともに、インターアクションにあきたらず、トランスアクションを採りあげることとなったのであろう。

しかしながら、もともと、デューイが用いていたインターアクションの用法のなかに、明確に、のちに発展するようなトラスンアクションとの区別、境界線があったのであろうか。それは一つの問題ではなかろうか。いいかえれば、デューイが『論理学』のなかで用いているインターアクションの概念そのもののなかに、トランスアクション的な用い方を見出すことは、かならずしも困難ではなかろう。さきにとりあげたように、デューイが、「現実に存在するものは、すべて完全に確定しているという考え方は、物理学そのものの進歩によって疑問とされている。たとえそうではないとしても、完全な決定は、環境としての存在には、かかわりないことである。なぜならば、自然は、有機体、あるいは自我（あるいはどのような名称であっても）、インターアクションに入ったときにのみ環境なのであるから(8)である」と述べているところは、二つの固定した存在の関係である相互作用のみならず、第三の自然、あるいは環境をふくめた機能的連関をあきらかに意識した説明であろう。

また知覚について論じた部分では、「常識の世界も、たしかに、知覚された対象をふくむ。しかし、これらは、環境という脈略のもとでのみ理解される。環境は、事物と生物とのインターアクションによって構成される(9)」と述べて

いるところからも、事物と生物、そして環境を結ぶつながりを強調しているので、単純な相互作用に限定されない意味づけがよみとられる。

ことに、第二章、「探求の現実的基盤—生物学的側面」(the existental Matrix of Inquiries-biological)の冒頭に、連続性をとりあげ、有機体と環境について、つぎのように述べているのは、ここで強調しているインターアクションの機能を強調しているばかりではなく、実に、トランスアクションの機能によってとりあげられた環境の設定にほかならないと云えよう。すなわち、「有機体の生命は、他の物と同様に、ひとつの環境をふくんでいる一つの活動過程である。その活動過程というのは、有機体の空間限界を超えたトランスアクションなのである。有機体は環境のなかに生きているのではなくて、環境を手段として生きているのである。呼吸、食物の摂取、排泄は、直接的な統一の例であり、血液循環、神経組織の刺戟は、どちらかといえば、間接的統一である」、また「もしエネルギーが過剰になれば成長がおこり、エネルギーが不足すれば退化がはじまるのである。世界には有機体の生命活動と無関係な事柄もある。しかしそれらは、潜在的にいえば、その環境の一部である。生きてゆく過程は、有機体によってとおなじように、実に、環境によってもおこなわれる。なぜならば、まさにそれは一つに統一されているからである。[10]「有機体が環境のなかに生きているのではなく、環境を手段として生きている」と説明し、「有機体と環境の統合と一体化」を強調しているところから、われわれは、ただに、有機体と環境の関係をとりあげて、インターアクション、つまり相互作用としてとらえるばかりではなく、活動する有機体相互とこれら有機体と環境の三つを一つの体系として考えてゆこうとするトランスアクショナるな思考の方向を見出すことができよう。現に、ここで有機体の空間的限界を超えたものとして、トランスアクションの語が使用されていることについては、厳密な用法にしたがった規定ではないとして

ものちに自己運動（self-action）、相互作用（interaction）、そしてとりひきとしてトランスアクション（transaction）の機能を認識していたものと推測することができるだろう。

（1） T. Dewey, Logic-the Theory of Inquiry, 1938, pp. 3-4.
（2） ibid.. p. 7.
（3） ibid., pp. 104-5.
（4） 全体状況について ibid., pp. 66-7 参照。
（5） ibid., p. 106.
（6） ibid., p. 106.
（7） ibid., p. 107.
（8） ibid., p. 106.
（9） ibid., p. 150.
（10） ibid., p. 125.

むすび

以上において、われわれは、第三節では、ベントリーとデューイの『哲学的文通』を素材として一九〇八年のベントリーによる『政治過程論』のなかに、トランスアクションの概念と方法論の源を探ることができる。また第四節では、デューイの『論理学』を中心として、その論理学にあらわれるインターアクションの概念と、それからひき出されるトランスアクション的意味を読みとることができると考えたのである。

では、結局において、共著『知ることと知られるもの』によって、ベントリーとデューイが到達したトランスアク

ションの概念は、どのようにして形成されたのか。その形成の過程は、『哲学的文通』の経過、共同研究の理論的な応酬の連続のなかから理解することができるだろう。